

《研究ノート》

## 健康心理学の受講者における疾患の主観的理解度

生 駒 忍

Subjective understanding for diseases in the class of health psychology

SHINOBU IKOMA

キーワード

健康教育 (health education), 主観評価 (subjective evaluation), 疾患知識 (knowledge for diseases)

心理学が歴史の短い学問として扱われることには議論があるが(鈴木, 2008), 中でも健康心理学は比較的新しい領域だと考えられている(例えば, 菅・十一・櫻庭, 2008)。今日では心理学を構成する重要な領域のひとつとなった。アメリカ心理学会には, 紆余曲折の末に(Wallston, 1997) 1978年に第38部会として健康心理学部会が認められた。そこにおける健康心理学の定義は, 「健康の推進・維持・疾病の予防・治療, 健康・疾病・機能不全に関する病因学的及び診断学的にみた相互関係, さらにヘルス・ケア・システムと健康政策の策定の分析と改善に対する心理学領域の特定の教育的, 科学的, 専門的貢献のすべてを包含したもの」(本明, 1990, p.77)と表現される。わが国では, 世界保健機関(WHO)の要請などを背景に, 1987年に日本健康心理学会が設立された。また, 主要な心理学の資格においても健康心理学は一定の位置を占めている。日本心理学諸学会連合による心理学検定では, 全10科目のひとつに「健康・福祉」があり, 国家資格である公認心理師のカリキュラムは, 大学における必要な科目に「健康・医療心理学」, 大学院における

必要な科目に「心の健康教育に関する理論と実践」を置いている。

一方で, 健康心理学は心理学の一領域に留まらず, 学際性の強い学問でもある。医学や社会福祉学といった分野の基礎知識なしに, 心理学としてのみ学習することは難しい。特にわが国では, 心理学が文系の分野として位置づけられていることもあり, 疾患や人体生理に関しては, 高等学校の生物の中で一定程度は学んでいることが多いとはいえ, 大学において初学者に十分な知識や関心があるとは限らず, 授業構成にも工夫を要するところがある。

そこで本研究では, 健康心理学を大学において履修し学び始めた学部学生を対象として, 一般的な疾患に関する理解度を質問紙調査により把握することとする。ただしここでは, 正確な知識があるかどうかの検証ではなく, 知っていると本人が思っている程度である主観的理解度を上げる。正確な基礎知識そのものも重要であるが, 授業の中でのなじみややすさ, 関心の引きやすさにつながると期待される側面を把握することは, より効果的な心理学教育を行う上で有用であろう。

また、本研究のもうひとつの目的は、春名・豊島・鷺尾（2014）の知見に対する批判的検証である。これは、高校生を対象とした喫煙に関連するアンケート調査の報告であり、健康心理学へも寄与するものであるが、疾患名を提示してそれがたばこを原因として起こるものかどうかの判断も求めている。その結果、肺がんでさえわずかながら誤答があること、心筋梗塞や脳卒中には3分の1ほどしか認識がないことなどがうかがえ興味深い。しかし、この調査手法では、示された疾患名がそもそもよく知らないものであったら、妥当性を欠くことになる。そこで本研究では、春名他（2014）が取り上げた疾患名を調査の対象とする。もし、健康心理学を学ぶ大学生において十分な理解度が確認されなかったとしたら、一般的な高校生を対象として尋ねたところで、妥当な知見が得られるとは考えにくいことになる。

## 方法

**調査対象者** 流通経済大学において「健康心理学」を履修している大学生25名（男性12名・女性13名；平均年齢19.7歳）が質問紙調査に回答した。医学や生理学を専攻する者は含まれなかった。

**調査時期** 2017年5月に調査を実施した。半期で開講される「健康心理学」の第4講の終了後に質問紙を配布し、回答を求めた。

**質問紙** 「以下に名前を示した疾患について、あなたがどのくらいよく知っていると感じるかを、0（まったく知らない）～4（よく知っている）の5段階のうちで最もよくあてはまると思われる数字に○をつけて回答してください。」として、肺がん、気管支炎、喘息、心筋梗塞、脳卒中、胃潰瘍、エイズ、はしか、結核の9疾患を提示し、それぞれ回答を求めた。疾患名の表記は春名他（2014）に従った。なお、春名他（2014）ではこの9疾患の他に「未熟児」も調査対象としているが、これは医学的な常識からは疾患とは言えないため調査対象から外した。

また、未熟児養育医療（給付）制度などの行政用語はあるが、今日では正規の医学用語として未熟児という表現を用いることはない。

## 結果

調査項目全てに回答した24名のデータを分析対象とした。主観的理解度の平均評定値を男女別に求めたところ、図1のようになった。2要因混合計画による分散分析を行ったところ、性別の主効果は有意ではなかった（ $F(1, 22) = 2.70$ ）。疾患種の主効果が有意であり（ $F(8, 176) = 2.25, p < .05$ ）、Holm法による多重比較を行ったところ、胃潰瘍の評定値が喘息、およびエイズに比べてそれぞれ有意に低いことが示された（ $p_s < .05$ ）。交互作用は有意ではなかった（ $F(8, 176) = .77$ ）。

Cronbachの信頼性係数を求めたところ、 $\alpha = .90$ となった。また、因子数を1として因子分析を行ったところ、モデルは棄却されず（ $\chi^2(27) = 31.0, p = .27$ ）、因子寄与率は.55となった。

疾患ごとに、評定値と回答者の年齢との相関係数を求めたところ、表1のようになった。いずれも正ではあるが、無相関検定の結果、有意なものはない（ $p_s > .10$ ）。

## 考察

本研究では、健康心理学を履修している大学生を対象として、9疾患に対する主観的理解度の調査を行った。得られた評定値からは、少なくとも主観的には、いずれの疾患にも一定程度の認知があること、しかし誰もが知っているとはまでは言いにくいことが分かる。その中で、胃潰瘍が目立って低いことが注意を引く。これは日常あまり見かけない漢字のために読めない、あるいは知っている感じがしないなどの要因が影響している可能性がある。ただし、喘息は胃潰瘍より高いことから、回答が単に漢字の印象のみでされているわけでないことは明らかである。また、信頼性係数や因子分析の結果から

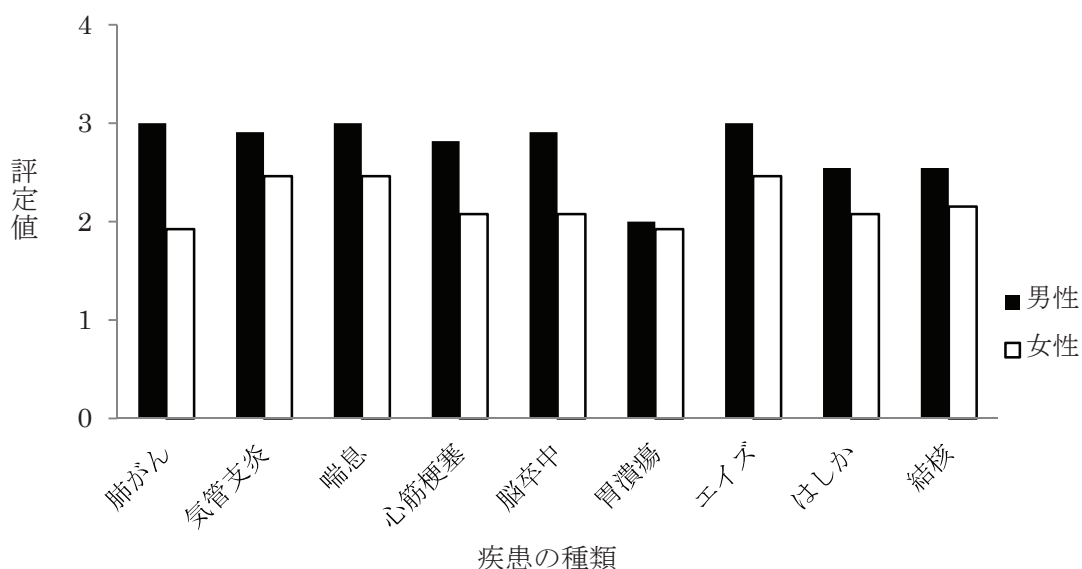


図1 9疾患に対する大学生の主観的理解度

表1 疾患の主観的理解度と回答者の年齢との相関係数

肺がん	気管支炎	喘息	心筋梗塞	脳卒中	胃潰瘍	エイズ	はしか	結核
.07	.07	.31	.12	.08	.03	.04	.28	.08

は、多様な疾患を取り上げてはいても、理解度は相互に関連していて、共通する要因に左右されていることが示唆された。

理解度と年齢との相関は有意ではなかった。調査対象者の年齢範囲が狭いことも一因であると思われるが、日常生活の中で学習が進んでいることの検出はできなかった。健康心理学に限らず、意識的な学習の機会を作ることの重要性がうかがえる。理解の促進は、予防教育のみならず、疾患の知識があることは服薬アドヒアランスと相関する (QLife, 2015) ことなどから、治療の際にも有用であると考えられる。

春名他 (2014) の知見については、本研究の結果を参照すると、妥当性にやや疑問を感じざるを得ない。本研究は大学生、春名他 (2014) は高校生で、一般的には高校生のほうが知識が少ないはずであり、年齢との相関がないとみな

して本研究と同様の理解度と考えると、対象者全てが十分に理解しての回答を行っていたとは考えにくい。知らない疾患についてたばこの関連を判断させられたデータが一定数混入していることが推測される。

もちろん、主観的理解度のみでの議論には限界があり、鳥田・平野 (2016) が今後の課題として示したことと同様に、客観的指標も重要である。今回取り上げた9疾患では少ないという限界もあるだろう。多様な角度から、健康心理学や健康教育に寄与する知見を収集していくことが求められる。

#### 引用文献

春名誠美・豊島泰子・鷲尾昌一 (2014). 『高校生における喫煙に対する意識と知識』四日市看護医療大学紀要, 7, 21-27.

本明寛 (1990). 『健康心理学に期待するもの』 社会心理学研究, 5, 75-82.  
QLife (2015). 『2万人の患者実態 20疾患アドヒアランス』 [<http://reports qlifepro.com/20adherence/>]  
島田英昭・平野友朗 (2016). 『行間と箇条書きがメールの読解プロセスに与える影響—視線計測による検討—』 日本教育工学会論文誌, 40 (Suppl.), 5-8.  
菅佐和子・十一元三・櫻庭繁 (2008). 『京大人気講義

シリーズ 健康心理学 [第2版]』 丸善  
鈴木光太郎 (2008). 『オオカミ少女はいなかった 心理学の神話をめぐる冒険』 新曜社  
Wallston, K.A. (1997). 『A history of Division 38 (Health Psychology): Healthy, wealthy, and Weiss.』 Dewsbury, D.A. (Ed.) *Unification through division: Histories of the divisions of the American Psychological Association: Vol. 2*, pp. 239-267.